

## 豊かな地球を未来に残す

### Handing Down a Greener World to Our Children



取締役副社長  
安田 洋  
Hiroshi Yasuda

豊田合成は、ゴム・樹脂をコア技術に、高分子の可能性を追求し、よりよい移動と暮らしを未来に繋ぐモノづくりのグローバル企業を目指し発展して参りました。主に、ゴム・樹脂の自動車部品を軸とした、モビリティ社会の変化を先取りした研究開発とモノづくり技術により、経済的な発展を遂げてきました。

ただ、一方で、ゴム・樹脂の、成形・加硫・塗装・めっきなどに代表される、私たちの製品製造工程では、大量の熱エネルギーを使うことが必要で、その過程で多くのCO<sub>2</sub>を排出します。また、我々が世の中に提供するゴム・樹脂製品はそのままでは自然に還りません。昨今、世界各地で異常気象のニュースをよく耳にします。昔に比べ熱中症のリスクがかなり高くなっていることは明白です。CO<sub>2</sub>を起因とした地球温暖化がかなりのスピードで進んでいる可能性が否定できません。また、マイクロプラスチックによる海洋汚染も深刻化しており、近い将来、マイクロプラスチックゴミの数が、魚の数を超えるのではと聞いたときは衝撃を受けました。豊田合成がゴム・樹脂の製品製造を生業にする以上、カーボンニュートラル・サーキュラーエコノミー・ネイチャーポジティブに取り組むことは宿命であり使命だと捉えています。

今後も、モノづくりのグローバル企業として、ステークホルダーのみなさまに認めていただくためには、社会的価値と経済的価値の両立が必須です。脱炭素社会の実現とは、どちらかを犠牲にすることではなく、その両立の先にあるべきです。

それは、単に声を上げるだけでは達成はできません。日々の省エネ改善活動、戦略的な再エネ活用はもちろん、モノづくり企業として圧倒的なCO<sub>2</sub>削減と原価低減を実現する設計技術、材料技術、生産技術の革新に全社をあげて取り組んでいます。本書にもいくつか代表事例を投稿していますが、製品機能を落とさずに、材料を環境負荷の低い材料へ置換したり、分別しやすい設計構造へ根本的に見直したり、工程統合により圧倒的にCO<sub>2</sub>使用量を削減する生産技術の確立など、多くの技術開発を実現しています。また、廃棄物に新たな価値を与えるモノづくりにも挑戦し、事業の一つとして育ててきています。

さて、話を少し変えて、私事で大変恐縮ですが、最近の一番の楽しみは、休日に4歳と1歳になる孫と過ごすことです。少し会わない間に歩けるようになったりと、彼らの成長には目を見張るものがあります。そう、彼らが成長する未来はすぐにやってきます。遠い先ではありません。私たち豊田合成グループは、2030事業計画に、提供価値として安心・安全・快適に“脱炭素”を加え、スコープ1、2のCN目標を2030年に前倒しすると同時に、サプライチェーンにおけるCO<sub>2</sub>削減目標も宣言することで技術革新をさらに加速させています。

これは、私たち豊田合成グループだけの努力のみでは実現は難しい非常に高い目標です。技術革新においては、産官学連携による開発や、尖った技術をもつベンチャー企業様との連携に着手し一定の成果も出てきています。仕入れ先様や協力会社様と連携した活動も新たに立ち上げています。

さらに、その私たちの想いをより多くの方に広げるべく、ネイチャーポジティブの考えに基づき、里山整備、ビオトープの設置、干潟の保全活動など、地域のみなさまと一緒に、生物多様性の保全に向けた自然共生活動に取り組んでいます。

冒頭の言葉『豊かな地球を未来に残す』は我々の経営理念から持ってきています。先人から脈々と受け継いできたこの意思を、我々社員一人ひとりが言葉にしながら豊田合成グループ一丸となり、ステークホルダーのみなさまと一緒に脱炭素社会の実現に全力で取り組んで参ります。

なお、今回は特別寄稿として、SIP第3期「サーキュラーエコノミーシステムの構築」の中心的な存在として研究開発事業を推進している伊藤耕三(東京大学特別教授)様から、カーボンニュートラル・サーキュラーエコノミーに関する国内外の動向と併せ、私たち豊田合成に対する期待の言葉を頂戴しております。併せてご一読いただき、私たちの活動をご理解いただけますと幸いです。